

カンランは前述のとおり特殊作物であるが、この場合には非常に高い収益性と考えられよう。しかし一般的には、価格も安定しており、労力、費用も少なくすむマルチA区の馬鈴薯—ソバが普遍性が大きく、慣行との比較にも無理がないものと考えられる。

本試験では、粗収入でマルチA区では慣行より87.5%の増が認められ、支出としてマルチ資材、労力として被覆分がマイナスとされるけれども、早期出荷と良質化による単価アップがプラスされるであろうし、明らかに有利な体系と判断できるであろう。

4. む す び

本地帯の馬鈴薯は商品作物としての成立から年が浅く、栽培法も自給的な従来の手法から脱却し切っていない。とくにその生産性の低さは、大豆を混作する栽

培法に由来するところが大きいものと考えられる。

マルチ栽培の導入により、必然的に混作は排除され、50%くらいの増収（混作に比べると70%）となり、良質で価格も有利となる。また跡地利用上も有利であって、ソバ、冬どりカンラン、秋野菜などの導入ができればよい。

その場合の試算としては、集約的な野菜類は労力、資材費、価格安定度で問題はあるものの高収益であり、ソバとの普遍性が高い体系でもかなり有利であることが、推察された。

馬鈴薯のマルチ栽培法はすでに本地域に広く普及しており、従来の主穀式自給的畑経営から、商品生産農業への展開の突破口として、今後大いに期待されるものである。

胡麻のマルチ栽培について

鎌田 信昭・古沢 典夫・佐藤 忠士

（岩手県農試）

1. ま え が き

本作物は自由貿易品目であって中国などから安価に大量の輸入があり、従来は商品生産作物としては成立しがたいものと考えられてきた。

しかしながら、岩手県では150ha程度の作付面積があり、その収量は4～5Kg/aと低収であるから、2.5倍の増収率をもたらしマルチ栽培法の導入は可能性のあるものと考えられる。

とくに、近年鉱物質の食品添加剤が問題になり自然食が尊重される気運にあることが反映し、加えてむらの多い輸入品よりも国産品が優れていることから、本県でも一部に胡麻の産地形成がなされつつある。

本試験は昭和43年度1年だけの試験で、品種、密

度、播種期、施肥法など未解決な点が多いが、重点作物でないため試験を打ち切ることであり、ここに成果の概要を述べて参考に供したい。

2. 試 験 方 法

1. 耕種の概要

- (1) 播種期：5月25日
- (2) 施肥量：N—0.3, P₂O₅—1.5, K₂O—0.8
(各Kg/a成分量, 単肥配合)
- (3) 補 植：7月15日
- (4) 除 草：7月17日

2. 供用品種 在来種（黒ゴマ）

3. 供試条件（第1表）

4. 試験規模 1区10m², 2連制

第1表 供 試 条 件

区 名	ホーリーシート名	畦 幅×株 間	m ² 当り株数	備 考
無 マ ル チ	無 マ ル チ	(50+60)/2+15 ^{cm}	12.1本	
白 マ ル チ	9215 透 明	//	//	
黒 マ ル チ	9215 黒	//	//	

3. 試 験 成 績

第2表および第1図に示すとおりで、透明および黒マルチともに初期生育から良好で、茎長、分枝数、着莢数においてはるかに優り2.5倍程度の多収が得られた。

増収の要因として莢数増がとくに大きく、千粒重もかなり増加していて、光沢、充実ともに黒マルチが優れていた。

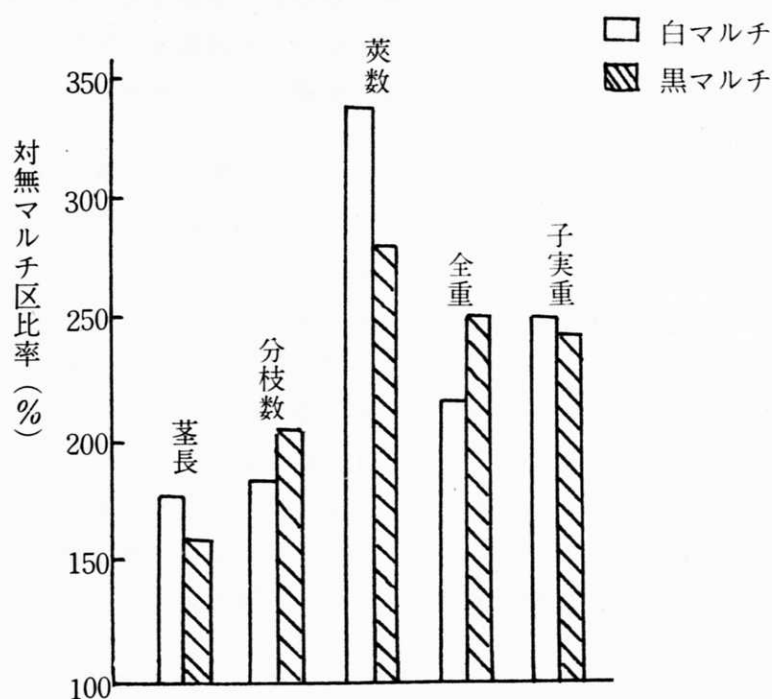
また、無マルチと比較して、成熟期は黒マルチで2日、透明では4日早く、早熟効果も顕著であった。

本作物では透明と黒とのフィルムの差による収量差は他の作物に比べると非常に少なく、品質では黒マルチが適当と判断される。

なお、本作物は非常に活着が良好な特性を持っているから、間引きの労力と考え合わせれば移植栽培のほうが有利であろう。

第2表 生育収量調査表

区 名	茎 長	同 比	分枝数	同 比	莢 数	同 比	全 量	同 比	子実重	同 比	千粒重	品 質
	cm	%	本	%	コ	%	Kg/a	%	Kg/a	%	g	
無 マ ル チ	75.3	100.0	2.0	100.0	15.4	100.0	18.60	100.0	4.32	100.0	2.09	中 下
白 マ ル チ	128.4	170.5	3.7	185.0	52.2	339.0	40.05	215.3	10.80	250.0	2.44	中 上
黒 マ ル チ	122.1	162.2	4.1	205.0	50.4	279.7	46.80	251.6	10.62	245.8	2.54	上 下



第1図 無マルチを100とした比率